

徳島ペンクラブ通信

1967年(昭和42年)創立

179号
2018年4月5日
(平成30年)

発行
徳島ペンクラブ
徳島市東沖洲2丁目1-13
徳島県教育印刷(株)内
TEL 088-664-6776

徳島県人初の公許女医はいったい誰なのであるか。医師会史や各種人物事典に目を通していても、女医や女医史についてまったく書かれていませんでした。それなら自分で調べてみようかと思いたち、明治・大正期の医師名簿や官報を調べてみました。その結果、明治期に4人、大正期にも4人の女医が誕生していたのです。

このうち県人初の公許女医は、増野(旧姓・乾)ヤエノで、明治29年医師免許を取得していること

西條敏美氏講演 「徳島の女医史 研究事始」

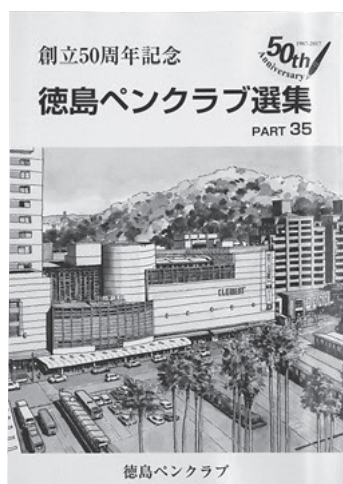
研修会
2月18日

がわかりました。しかし島根県に渡っているの
で、徳島で初めて開業した女医となると、明治44
年医師免許を取得した長木(旧姓・露木)イシであ
ることがわかりました。大正2年の開業です。

名前だけはわかって、彼女らの具体的な足跡
になると、子孫宅を探し出して話を伺うしかなか
った。古いアルバムの顔写真を見て、初めて、彼
女たちを心に描けるようになりました。



講演では、事
始として徳島の
女医史の概略と
長木イシの足跡
を1時間にわた
り話されまし
た。



徳島ペンクラブ選集 PART 35号 創立50周年記念誌 401頁

1000部

昭和42年(1967年)11月に産声をあげて、
50年を迎えたのを記念して「創立50周年記念
徳島ペンクラブ選集PART35」を平成29年
(2017年)10月に発行しました。50年の歩
みを50頁にわたり網羅し、先輩方の活躍の歴
史も綴り、歴代会員の氏名も掲載しています。
B5サイズ、全401頁。
定価2,000円(消費税8%込み)です。

総
会

2018年5月20日(日)
午後4時~
阿波観光ホテル

詳細は、8頁をご覧ください。

1100席を

徳島ペンクラブ賞授賞式

7名の随筆、徳島市文芸誌「まゆやま」に掲載

2月18日、阿波観光ホテル

自由テーマで執筆した随筆を選ぶ「徳島ペンクラブ賞」授賞式が2018年2月18日、徳島市のJR徳島駅前「阿波観光ホテル」で開かれました。

徳島ペンクラブ賞は、渡辺恵子さんの「何百万粒の涙」。次点は、辻本一英さんの「一葉のはがき」、六田靖子さんの「母福者」の2作品が選ばれました。



竹内菊世会長から徳島ペンクラブ賞の賞状を授与される渡辺恵子さん



次点の辻本一英さん（右）と六田靖子さん（左）

この3名の作品と、東條孝さんの「ソプラニスタ」、東根泰章さんの「お鯉さん77歳からの再活動秘話」、山本安信さんの「慟哭——バードバスからの追想——」、小川公三さんの「悔悟——ある認知症患者の悲哀——」の4作品が多く得票で選出（順不同）されました。

7作品は、徳島市文芸誌「まゆやま」に掲載されます。

会員ら33名が出席する中、竹内菊世会長から徳島ペンクラブ賞の渡辺恵子さんに賞状が授与されました。

「創立50周年記念 徳島ペンクラブ選集PART35」の全401頁を読んだ、木村英昭理事は、「毎回、楽しみに全文に目を通しています。今回も、それぞれの執筆者の思いが伝わり感動しました。」とマイクを持ち、爽やかな

表情で話されました。また、会員有志も感じたままを発言し、今後の参考にしようとして、執筆者はメモを取っていました。

懇親会では、同じテーブルに着席した人と会話に花を咲かせたり、舞台での喜島政行さん奏でるギター演奏に酔いしれました。竹内菊世、三輪和、二橋満璃、関真由子の4人が飛入りで歌声で参加しました。出席者からは、惜しい拍手が送られ、なごやかな雰囲気です幕を閉じました。



随筆が選ばれた（右から）小川公三さん、東根泰章さん、東條孝さん



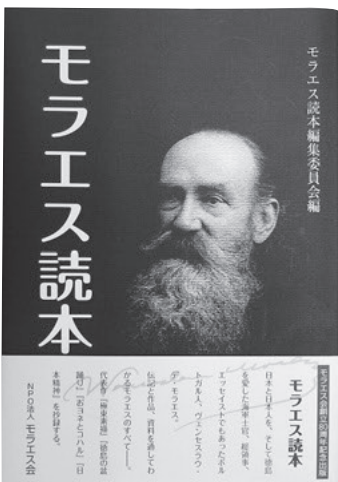
全401頁の読後感を述べる木村英昭さん



（右から）喜島政行さん、三輪和さん、竹内菊世さん、関真由子さん、二橋満璃さん

トピックス

丁山俊彦さん発行者の「モラエス読本」が、『第42回とくしま出版文化賞』を3月29日受賞しました。A4サイズ、全210ページ。印刷・徳島県教育印刷株。





福島せいぎさん 月刊「なると」450号を記念し、平成22年から29年までを選句した300句を生きた証として、「自註句集 続福島せいぎ集」を平成29年11月に出版されました。B6判変形、全169頁。

ほんの散歩道

出版された方は、ご連絡下さい

関真由子さん、竹内菊世さん、竹内紘子さん、東條士郎さん、二橋満璃さん、三輪和さん、大杉洋子さん（ペンクラブ35号名簿順）ら、「連句集 花音」⑧を平成30年3月10日出版されました。A5判、全199頁。



東根泰章さん作詞 CD、徳新・朝日に掲載

北島町(板野郡)依頼の北島音頭を作詞されました。3月19日徳島新聞、3月27日朝日新聞に掲載されました。2紙共、A4サイズ大。(下のは徳新を縮小)

2018年(平成30年)3月19日 月曜日 徳島 (12)

また催しで楽しんで

北島音頭(21世紀版)
 【1番】 日本列島 空から見れば 輝いた国に ひとよたんだ みたい 町がある 阿波の徳島県 北島町 三つの川が 野菜育てて 花咲かす ほんまに ええんでえよ 北島音頭で 町自慢
 【2番】 昔ながらの 伝統続く 五穀豊穡 大平願う 獅子舞う 阿波の徳島県 北島町 舞九郎舞 ゆかた姿で 浮かれ出る ほんまに ええんでえよ 北島音頭で 町自慢
 【3番】 吉野川から そよ吹く風が チューリップに 鮮やかな彩色 つけてゆく 阿波の徳島県 北島町 汗を流して ふれあう心 いつまでも ほんまに ええんでえよ 北島音頭で 町自慢
 【4番】 山がない分 町は明るく 元気な町に 工場 阿波の徳島県 北島町 月の明かりが わが家を照らし 明日を呼ぶ ほんまに ええんでえよ 北島音頭で 町自慢

北島音頭 21世紀版 完成

北島音頭は、開港 300年を記念して、その存在が忘れられたのを、町文化協会の有志が、2017年(平成29年)から、2018年(平成30年)にかけて、北島音頭を完成させた。CD製作とあり、今後、町文化協会の催しとして展開して楽しむ。2019年(平成31年)には町文化協会の催しとして展開して楽しむ。

町文化協がCD化

北島音頭は、開港 300年を記念して、その存在が忘れられたのを、町文化協会の有志が、2017年(平成29年)から、2018年(平成30年)にかけて、北島音頭を完成させた。CD製作とあり、今後、町文化協会の催しとして展開して楽しむ。

あす創世ホールで披露会

北島音頭は、開港 300年を記念して、その存在が忘れられたのを、町文化協会の有志が、2017年(平成29年)から、2018年(平成30年)にかけて、北島音頭を完成させた。CD製作とあり、今後、町文化協会の催しとして展開して楽しむ。

ユニッセー

日本では、4月23日が「子ども読書の日」で、国際的には、ユネスコに指定された「世界本の日」です。

本の扱いを仕事としていた小松島市立図書館開館の平成4年(1992年)は、図書館が脚光を浴びました。

フジテレビ系で、4月から6月まで毎週夜の9時から約1時間のドラマ「素顔のままで」が、視聴率26.32%を得る放送で、トレンドドラマと呼ばれたのです。

図書館が動いている

図書館司書役を安田成美さんが、同じ25歳の女友達役を中森明菜さんが演じ、オープニング曲は米米CLUB「ト君がいるだけで」を流し、脚本家は北川悦吏子さんでした。

ふり返ると何気なく図書館司書と司書教諭の資格を取るために、大学4年間のうち、夏休みの2年間を費やしてから、仕事に活かされてなかった資格を22年目に活用でき、しかも、当時、話題の職業にな

り驚いていました。徳島県内50市町村(当時)では、那賀川図書館をはじめ、新しい図書館ができ、現在に至っています。

利用者を増やすために、大きな変革が全国で起きています。徳島市立図書館は、平成24年(2012年)4月1日、

当時の中央公民館からJR徳島駅前のアミコビル内へ移っています。5階にあったシビックセンターの部屋をなくし、6階にあった徳島東急インホテルを閉鎖しての開館でした。眉山が見えるテラスやラウンジがあり、快適な間取りです。公立図書館初の自動貸出機も設置され、利用者は3倍に増えています。

美馬市では、脇町うだつ通りにあった図書館が、近くのキョーエイ脇町店が入るパルシーに2018年5月に移転。なんと専門店が出て、その場所に地域交流センターの500席弱のホールなどの併設です。

この2館を含む、県内の図書館運営は、専門会社の(株)図書館流通センターなどが業務受託しています。図書館は、見える所と見えない所で動いています。(東根泰章)

文学とは対極にある私ですから、講評というより編集担当者としての感想ということでご容赦ください。編集に携わっていますと、漢字、送り仮名、段落などに気を取られ、その作品を楽しむことが難しくなります。今回の記念号もそうで、投票するに当たって、はて…といま一度読み返す必要に迫られました。その上この度は講評ということ、得票の多かった方の作品をさらにじっくり読み返してみました。テーマの目付けどころ、全体の構成、言いたいこと、面白さなど、どれも実に良く書かれていて、味わい深く、優秀な書き手の多いことに今さらのように驚いています。

そんな中でも、原稿が送られてきて一読したとき、「これはいい。泣かせる。ペンクラブ賞候補だ」と直感したのが、渡辺恵子さんの作品でした。何度も読み返してはじめて、その良さが理解できる文章もあります。が、やはり一読して心に響く文章がベターなのではないでしょうか。

渡辺恵子さんの「何百万粒の涙」。若かったお母さん時代、病身だった身の上と、幼稚園児の息子さんの教育を巡っての葛藤を、ご近所の散髪屋さんの話をからめて率直に綴られています。タイトル「何百万粒の涙」も決してオーバーではない。小さい子供さんを持つ若い母親の心情が、歯切れ良く、淡々と手に取るように表現されていて、好感度ナンバーワンと評価します。

六田靖子さんの「母福者」。書けば賞に入る題材はいつも身近のことに限られているながら、よくぞまあ、次から次へと話題があるものだと感心します。今回は世にも稀有な4人の母、生母、養母、継母、姑との実話。幼い時に死別した実の母以外

PART 徳島ペンクラブ選集 35

編集長の講評 田上 倉平

の3人の母の後半生の面倒を見るのが宿命のようなご自身の半生。人知れず苦労したであろうことはおくびにも出さず、むしろユーモラスに描写。今、息子さんの嫁から「お母さん、お母さん」と慕われるのは、「4人の母たちのお陰、余得に相違あるまい」と結んでいます。現代版「おしん」を連想させ、内と外との違いはありますが、その生き様はボランティア精神にも相通じるものがあるように思われます。

辻本一英さんの「一葉のはがき」。年季奉公で、大阪の呉服問屋に8歳で子守奉公に出た明治生まれの女性が主人公。今、8歳を越えて、週1回、夜開かれる読み書き教室に通いながら、奉公に出た当身を振り返って、教室で習ったばかりの文字で病身の父親と働き者だった母親にはがきを書く。

「わたしを八さいまでぞだててくれてありがとうございます。おとうさんのございます。おかねをおくります。おとうさんのくすりだいにしてください」。口減らしのための子守奉公、本人はしかし不幸とは思っていない。そんな時代でした。識字率という言葉も今ではほとんど死語になっていますが、8歳になって文字が書けるようになった喜びが、行間からくみ取れます。一つだけ気になったのは文頭。いきなり時代背景から入っていますが、一段目最後のほうの「文字を書くことを何よりも楽しみにしている人がいる」ではじめたほうが良かったのではないのでしょうか。

山本安信さんの「慟哭——バードバスからの追想——」。田舎の庵を舞台に、亡き父との思い出を綴った好エッセー。野鳥や周囲の自然と父子の描写は、まるで映画を見ているようです。安

信さんのエッセーには、いつも田舎の自然が背景にあり、親子の会話からはほのほのとした心のぬくもりを感じます。卒寿を過ぎてなくなった父の葬儀に、見知らぬ老女がやってきてつぶやきました。「おじいちゃん。逝つてしまうたんじゃな。おいてきぼりにして……。仲ようしてもらうてありがとね。いいところへ行きなよ」。阿波弁が生きています。安信さんにとつては、言葉では表現できない感動の一瞬だったろうと想像されます。

東根泰章さんの「お鯉さん77歳からの再活動秘話」。一読して、お鯉さんにこんな裏話があるとは驚きの一語でした。私も、お鯉さん96歳のときに、県の情報誌の取材でご自宅にお邪魔しインタビュー、その時の録音テープは私の「宝物」として大事にしまっています。しかし、お鯉さんが晩年にも大輪の花を咲かせた裏で、その芸にほれ込んで、表舞台に再び引つ張り出した東根さんの人を見る目と黒子となつての行動力、さらにその根性には脱帽です。「百歳で好きなお三味線やよしこのを歌えればもう思い残すことは何もありません。女の冥加に付きます」と私に話してくださつたお鯉さん。草葉の陰でもきつと縁の下の力持ちとなつてくれた東根さんに感謝、感謝の毎日でしょう。こんな取つて置ききの秘話を、記念誌に寄せていただいたことに大きな拍手を送りたいと思います。

東條孝さんの「ソプラニスタ」。東條さんは時々、冗談交じりに「芥川賞を狙っている」と言っていますが、この作品を拝読して、あながちオーバーな夢物語でない、そんな読後感です。団塊の世代に育つた二人の男。一人はノンポリで、白球に青春をかけた大柄な筆者、もう一人は学生運動にのめりこみ、革マル派の組織の中にいた小柄な男。その男は退職後インターンして佐那河内村へ。農業の傍ら、阿波踊り、マラソン、朗読会やコンサートにも顔を出す活動家。



コーラスではソプラニスタに早変わりして熱唱する。そんな男二人のお話です。年を経て大川原高でのまき拾いで知り合う。お互いの息子さんも登場し、その男の息子さんが、暴走族と縁を切つて弁護士になったことを知り、驚く。その息子さんに筆者は心の中で呼びかける。「弱者に寄り添つて、正義を貫く、そのために声を法廷で鳴り響かせよ。ソプラニスタ二世なのだから」と結んでいます。文章が実にうまい。文頭、文末が秀逸で、と感じました。情景描写も素晴らしく、映画の題材にもなりそう。思わず脚本を書いてみたくなるような一編でした。

小川公三さんの「悔悟——ある認知症患者の悲哀——」。ある女性認知症患者への訪問看護という仕事を通して、人間の生と死について深く考えさせられる一編です。平々凡々に生きてきた私には、訪問看護師というお仕事についてなんの知識もなく、こんな世界もあるのだと認識させていただきました。おそらく、病院勤めを退職後、関連の訪問看護師というお仕事を通しての筆者の体験をもとにしたお話だと思います。認知症患者に対する筆者の葛藤が正直に綴られていて読後感がとても良かったです。

以上、ペンクラブ賞の渡辺さんと次点のお二人、それに続く4人の方の作品について私の感想を述べさせていただきましたが、一点だけ付け加えさせていただきます。ペンクラブ賞の対象外ですが、99歳・木村義次さんの長編の詩「元気でばたけコウノトリ」には、その若々しい感性に感動しました。皆さんとご一緒に拍手を送りたいと思います。

※ 今号をもって田上倉平編集長は、ご勇退されました。ありがとうございます。感謝。

応募締め切り

6月30日

第19回とくしま随筆大賞

徳島ペンクラブ主催の「第19回とくしま随筆大賞」の募集要綱がこのほど決まりました。(ペンクラブ会員は、すすんで応募してください)

●**応募規定** 内容は自由(エッセー、随想、主張など)。1人1編、未発表の作品に限る。A4、四百字詰め原稿用紙3枚以上5枚まで(縦書き)。ワープロの場合はA4サイズに40字×30行。原稿用紙に通し番号(ページ)をふる。1行目に作品名と氏名を記入する。別紙に、作品名・氏名・性別・年齢・郵便番号・住所・電話番号を記入し、原稿に添付。筆名の場合も、本名と筆名を記入。

●**応募資格** 徳島県内在住者、または徳島県出身で県外在住者

●**作品送付先** 〒770-0873 徳島市東沖洲2丁目1の13

●**徳島県教育印刷(株)内 徳島ペンクラブ「第19回とくしま随筆大賞」係**

●**締め切り** 2018年(平成30年)6月30日(当日消印有効)

●**発表** 8月(予定)徳島新聞に発表、および本人に通知

●**賞** ▽大賞(1編) 賞状・賞金3万円

▽準大賞(1編) 賞状・賞金1万円

▽佳作(1~2編) 賞状・記念品

大賞・準大賞の作品は平成30年12月発行予定の「徳島ペンクラブ選集」に掲載

●**表彰式** 9月9日(日) 場所 阿波観光ホテル

詳細は後日、受賞者に直接通知する

●**審査員** 依岡隆児・徳島大学総合科学部教授▽柏木康浩・徳島新聞生

活文化部部長▽竹内菊世・徳島ペンクラブ会長

詳しいことは

大賞実行委員会委員長 上窪青樹 電話090 7142 2852



新町橋から見た郷文方向

ペンクラブ 春の文学散歩 ひょうたん島 「橋づくし」ツアー

4月30日(月・振替休日)に第3回目の「春の文学散歩」を実施します。今回は、三島由紀夫の短篇小説「橋づくし」にならって、小説と同じように、ひょうたん島に架かるさまざまな橋を渡ってみたいと思います。三つ合橋からふれあい橋まで8つの橋を渡り、周辺にある文学碑など文学遺跡の説明も交えながら歩きます。



本県出身の詩人野上彰の子どもたちは、生前の三島由紀夫と川端康成邸で交流があったそうですし、新町橋南畔にある野上彰詩碑を巡ることもあり、「野上彰の会」との合同開催です。

開催日 平成30年4月30日(月・振替休日)

集合 午前9時50分、三つ合橋の西たもと

スタート 午前10時

コース 三つ合橋(集合)→佐古大橋→船場橋→仁心橋→あいせん橋→春日橋→新町橋→ふれあい橋→シビツクセンター(解散)

※アミコビルでは、徳島市シビツクセンター3F市民ギャラリーで開催中のペンクラブ主催の「文学碑パネル巡回展」を見学します。その後、希望者は東急1Fの「シャングリ・ラ」にてランチバイキングしましょう。ランチ代金1300円(各自お支払いください)備考 このツアー参加にあたって、あらかじめ三島由紀夫「橋づくし」をお読みください。散歩がなおいっそう楽しいものになると思います。

申し込み 4月25日(水)まで

担当 丁山俊彦 電話090 4508 0538

徳島ペンクラブ50周年記念企画

文学碑パネル巡回展

県内の「文学碑」をご紹介します！



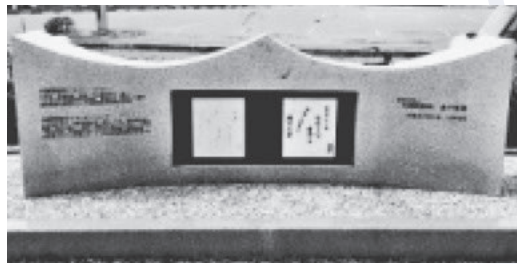
原田一美 記念碑 (吉野川市美郷)



ホルトガルの文人・モラエス碑
(徳島市阿波おどり会館前)



「お山の杉の子」吉田テフ子歌碑
(海陽町六喰)



与謝野鉄幹・晶子歌碑 (小松島市)



貴司 山治 校歌碑 (鳴門市高島)



富士正晴 生誕碑 (三好市山城町)
(7点の写真は、一例です)



野上 彰 詩碑 (徳島市新町橋畔)

開催日程 2018年

- ① 4月2日(月)～4月15日(日)
- ② 4月24日(火)～5月6日(日)
- ③ 5月12日(土)～5月30日(水)
- ④ 6月2日(土)～6月20日(水)
- ⑤ 6月27日(水)～7月4日(水)

開催会場(時間は、各会場の開館時です)

- 吉野川市川島町 吉野川市立川島図書館
- 徳島市シビックセンター3F市民ギャラリー
- 海部郡美波町 美波町日和佐図書・資料館
- 三好市池田町 三好市中央図書館市民ギャラリー
- 鳴門市撫養町 キョーエイ鳴門駅前店4階

主催 徳島ペンクラブ文学碑パネル巡回展実行委員会

後援 徳島新聞社 四国放送 徳島県立文学書道館 ①吉野川市教育委員会 ②徳島市教育委員会

③美波町教育委員会 ④三好市教育委員会 ⑤鳴門市教育委員会

入場無料

総会

板東浩氏が講演

5月20日(日) 阿波観光ホテル

日時 2018年(平成30年)5月20日(日)午後4時から

場所 徳島駅前 阿波観光ホテル

演題 「日野原イズムと音楽で健やかなベストエイジングを」

講師 日本抗加齢医学会評議員

板東浩氏

受付 午後3時半～4時

講演 午後4時～5時

総会 午後5時～6時

懇親会 午後6時～8時

会費 6,000円(懇親会費)

申込 同封のハガキ用紙(62円切手貼付を)

備考 申込後のキャンセル連絡は、2日前迄にお願いします。

それ以後は懇親会費を請求させて頂く場合があります。

連絡先 安曇統太 電話090 8692 9613

皆様の御出席を
お待ちしております

訃報

元木 精之介さん (平成29年11月逝去)

杉田 卓 武さん (平成30年1月7日逝去)

小谷 史 井さん (平成30年2月22日逝去)

長年にわたり徳島ペンクラブにご尽力頂きました。ご功績に深甚なる感謝を申し上げ、心からのご冥福をお祈り申し上げます。(合掌)

編集の委員会組織をこの179号から新体制となりました。これまで9年間を担当して頂いた田上倉平副会長の流れを受け継いで頑張ります。

会員の皆様から沢山の筆だよりを随時お送り下さい。お待ちしております。(編集委員会)

心強いスタッフに号令を掛けるのみで、なんとか発行することができました。今はホッとしているというのが本音です。(上窪則子)

文学碑パネル巡回展は川島から始まる。いったいどれだけの人が見てくれるのか? ちょっと心配です。(高木 純)

「なんでもやってみなくちゃわからない」と開き直り、あとは猛者スタッフに付いていくのみです。(竹内紘子)

編集スタッフになりドキドキワクワク、不安もいっぱい楽しみもいっぱいです。早く編集を把握したいと思っています。(関真由子)

文学散歩、そして企画展。仕事が増えるばかり。気が弱いのでつい押し切られてしまう。今度は編集顧問にと。(丁山俊彦)

毎日の情報を発行している徳島新聞の夕刊が、4月から一新されました。文学面が多彩に掲載されますように。(東根泰章)

バックナンバーあります

徳島ペンクラブ選集



毎回好評の徳島ペンクラブ会員の力筆による「徳島ペンクラブ選集」のバックナンバーは、少しですがあります。ご希望の方は、徳島県教育印刷株 電話088・664・6776番まで。

編 集 後 記